現代版「みんなで子育て」の拠点

宮城県気仙沼市　子育てシェアスペース Omusubi

1. 活動内容

子育てシェアスペースOmusubi（運営：一般社団法人Ripple）は、宮城県気仙沼市の気仙沼市役所から徒歩5分ほどにある空き家を活用した施設です。

①認可外保育施設機能
（図面内右下部の託児スペース）

「一時預かり専門託児所」は30分（450円）単位で子どもを預けることのできる認可外保育施設です。当施設は、預ける理由は問いません。病院、美容院、上のお子さんの行事、引っ越し準備、ママ自身のリフレッシュ等様々な理由でご利用をいただいています。運営を開始した令和2年度から令和7年度末までの利用者は6901人に上り増加傾向が続いています。

現在は唯一、市内で生後1ヶ月から託児を受け入れられる施設として最大小学生までを対象とし、市区町村問わず受け入れが可能です。最短で前日にネット予約ができ、予約内容も最低限の情報とし日々の忙しいママたちが気軽に予約に進めるよう配慮し、見学なしで利用可能、当日のキャンセルでも料金はかかりません。

②コワーキングスペース（図面内左上部のママのリラックスルーム）

「ママのリラックスルーム」は、託児所にお子さんを預けて、ママたちが作業をしたり、休める場所になっています。資格取得のための勉強、つわりの時期に休む、入園前の準備を進めるなど様々活用をいただいています。

③女性専用シェアハウス
（図面内右上部のシェアハウス）

「女性専用シェアハウス」は、定員最大6名のシェアハウスです。移住・就職・進学する女性が楽しく過ごして欲しいという想いと、同じ施設で子どもたちの声を聞いたり、目にすることで、結婚、出産、子育てのタイミングがもしきた時に、ここでの経験がいきてほしい、という想いを持って運営しています。

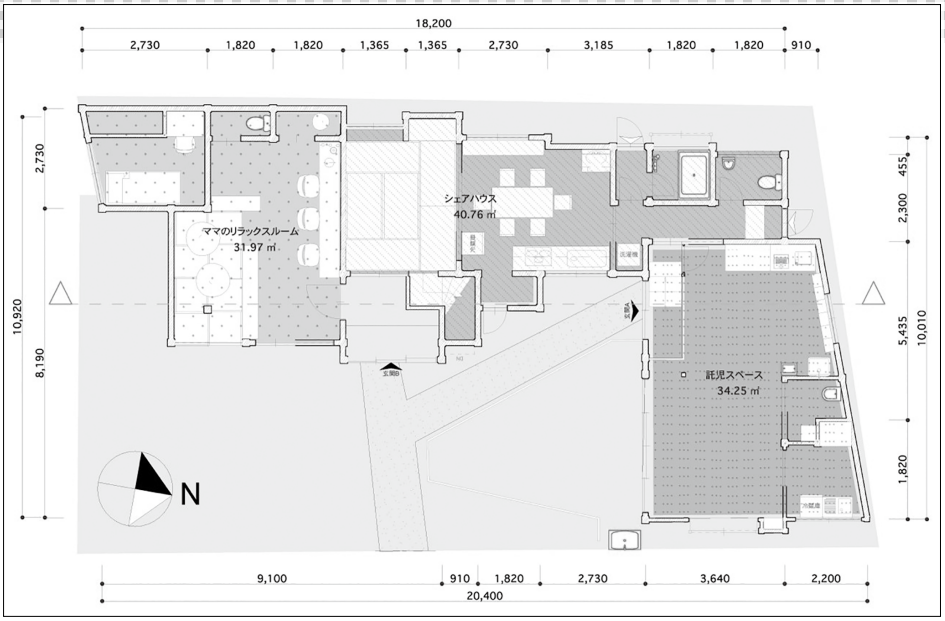
④「子育てをシェアする」とは？

昨今、我が国においては核家族化が進み、気仙沼においても震災により家を流されたことに起因して急速に核家族化が進み、出生数が年々激減しています。このような背



景は社会構造に起因することで改革は難しいですが、こうした現代に合わせた子育てシェアが必要です。当団体が提供する子育てシェアは大別すると3点に分けられます。

まず1点目は一時預かりという形態そのもので、これまで子育てママが働いて保育所に預けるというモデルから、働いていなくてもどんな理由でも必要な時間だけ預かれるという仕組みです。



Omusubi 全体の平面図

2点目はスタッフ構造で、働いている保育士等のスタッフも子育てママで子連れ出勤可能な点です。自らの子どもを見ながら保育士として働ける保育施設は全国でも未だ珍しい現状です。現在、9名のスタッフが子育て中（設立当時から含めると計20名）です。その他、短期スタッフとして活動に関心のある学生や保育士などを41名受け入れてきました。

3点目に子育てシェア制度という独自制度です。これまで29名が登録してくださっているこの仕組みは預かった分だけ預けることのできる制度です。施設の手伝いに入った時間だけ子育てシェアチケットが発行され、このチケットは次に自分が子どもをOmusubiに預ける際に同時間無料券として使えます。

2. 現在までの成果

①活動のきっかけ

私たちの活動は、市が主催した市民の意見交流の場「子育てタウンミーティングvol・1」で出てきた「検診や母親が病気の際に預ける先がなく困っている」という意見（※1）から始まりました。その後、追加調査（N＝137）を行ったところ、「一時預かり保育」のニーズが高いことが分かり、空き家探しへと踏み出しました。


たくさんの方の協力をいただいて事業を開始することができた

②設立までの経緯

人間として当たり前の感情である「休みたい」「ちょっとだけ一人になりたい」といったものが「ママ」になった途端に急にハードルが高いものに変わってしまう。そこで、「ちょっと困った」に「少しだけ」「できるだけすぐに」寄り添える場所となるように環境設定を考えていきました。一方「一時預かり」

の構想を進めていく中で、「預けた後にゆっくりできる場所が欲しい」といった声も聞かれ、ママたちのニーズに応えるためには、共に「預けた後のママの居場所」も必要だと感じたこと、また「子どもは好きだけれども、中々接する機会がない」という、若い世代からの声も聞こえてきたことから「若い世代が子育てに触れる機会」を作ることも必要と感じ、これらを実現するために3つの機能を併せ持つ場所を作ろうと動き出しました。リノベーションの際には、小学生やママたち、地域の大工さん、全国のボランティアなど本当にたくさんの方にご協力いただき、クラウドファンディングで全国217名の方の支援を受けながら作業を進めていきました(※2)。

③設立後の地域展開

令和2年2月に正式に託児事業を開始し、ママが「ひとりになりたい」と思った時にそれを叶えられる環境と、子育てに迷ったり気持ちを聞いて欲しい時に「誰かに聞いて欲しい・相談したい」が叶えられる場所であるようにとの願いを込めて「ひとりにならないひとりになれる」というコンセプトを掲げました。

翌年の令和3年にはOmusubiだけでは変えられない市内の子育て全体の課題を解決すべく市内全ての子育て支援団体と行政担当課が所属するコレクティブインパクトプラットフォーム"コソダテノミカタ"を立ち上げ(※3)、その事務所としてママのリラックスルームを活用し、代表理事の田中と村上が活動の中核を担っています。令和4年には市内の「わくわくけせんぬま」と協働し、子育て支援拠点事業も開始しました。また、活動当初から気仙沼市の関係人口創出に資する事業として保育版ふるさとワーホリの受け入れを行い関連領域への拡大を図ってきました。

Omusubiの活動は「小さなママの困りごと」から始まりました。たった小さなことだったかもしれませんが、その気持ちを抱いているママたちは、地域の至る所で、そのモヤモヤを抱えながら生活をしています。気仙沼市は、海も山もある、自然豊かな場所です。その魅力に気づきながら、この場所で、子どもと向き合いながら子育てをしてほしい。もし可能なら、その日々がより豊かであたたかいものであってほしい、そう願って、みんなで活動を続けています。ママたちが孤立せず、自分も、子どもも、家族も大切にできるような場所の一つとして、子育てシェアスペースOmusubiがあり続けられればと思います。



子育て中のママたちを中心に、安心・安全な環境で預かりができるよう受け入れ態勢を整えている

【補注】

(1)田中惇敏、西村歩、松本光基、井庭崇「宮城県気仙沼市における良好な「子育て環境」の規定要因の理解」実践政策学、2022、8巻、1号、p.55-65

(2)田中惇敏、鵜飼修「多様な主体の参画による子育て拠点の創造プロセス」都市住宅学会、2024、118巻

(3)田中惇敏、鵜飼修「地方におけるコレクティブ・インパクトの実現―けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム"コソダテノミカタ"を事例として」地域デザイン学、2024、23号、p.227-284

(子育てシェアスペースOmusubi
代表理事　田中惇敏)